

# 水源を訪ね、異界を知る

三月二十五日(木)より開幕した民博の企画展「水の器 手のひらから地球まで」(一、六月三日(火)までは、水と人の多様なかわりが四つのコーナーをつないで構成されている。各コーナーは「一、生活世界の身近な器」「二、多様な水源」「三、水の器・地球」「四、水のペットボトル」からなっているが、わたしはおもに二番目の「多様な水源」コーナーを担当した。

## さまざまな水源

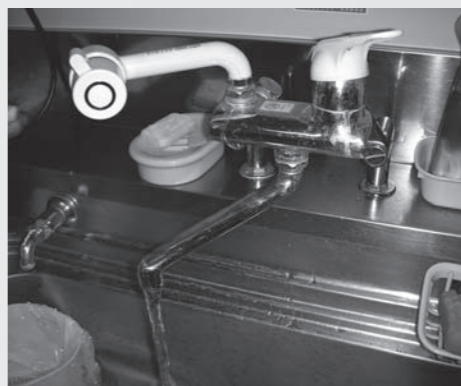
人びとは飲み水をどこからえているのだろうか?この素朴な疑問から水源を求める作業は始まった。日本ではほとんどの人は水道栓をひねれば、飲み水を口にすることができ、スーパーやコンビニでペットボトルの水を求めることができる。現代人にとっての水源は水道栓であり、コンビニのペットボトルコーナーなのかもしれない。では、これらの水は



コンビニのペットボトルコーナー

どこから生活世界にもたらされてくるのだろうか。多くは貯水池、ダム湖、井戸などの大規模な水の器に溜められた地下水や雨水、河川の水などにたどりつく。湖沼の水や泉水、湧水も自然界にある貴重な水資源だった。

日本でも多くの地域で、わずか数十年前までは飲み水を始め、日常生活用水の多くを自然の水源に頼っていた。当時、人びとは飲み水を供



水道栓の水

給する水源までたどりつくことしかできなかった。その先(奥)は得体の知れない不明の異界だったのである。そのような環境のもと、人びとは、水の恵みをもたらす水源に畏敬を抱き、神話や伝承、儀礼を傳達させてきた。水源は人間にとって不可視の自然と現実の世界を結ぶ接点となっていた。異界と現実の世界とを結ぶ接点となる場所が、人びとが水を獲得する水源地だったといえる。



民家の井戸端。榎原市北越智町(2009年)

### 異界とつながるバリ島の湧水

このように水源地を介し、生活世界と異界との交流を実践する社会の一例をインドネシア、バリ島の人びとの信仰生活からかいま見ることとする。

バリ島は、美しい棚田が広がる田園風景が世界的にも有名で、ヒンドゥー教の信仰が今も息づく島としてもよく知られている。急斜面に畦



斜面に広がる棚田。インドネシアバリ島(1995年)

を作り段差を付けて棚田とすることで、保水力を高め、雨水が一気に流れ落ちずに地下に浸透しながら、高い所からだんだんと下に流れるようにした灌漑技術はお見事という他はない。水がゆっくりと地下に浸透することで、地割れや地滑りを防ぐこともできる。そして、田植えから収穫まで稲作全体が彼らの信仰体系に組み込まれ、水がじっくりと浸透するようにゆったりとした時間が流れている。

バリ島の地面に吸収された雨水は地下水として脈々と流れ、島の随所

に湧水が出る。その湧水は人びとの飲み水や生活用水となるだけではなく、年に幾度とおこなわれる儀礼の聖水として欠かすことができない水でもある。聖水は大地から湧き出る清らかな水でないといけない。儀礼は日本でおこなわれていた若水汲みと同様に、この水を汲みに行くことから始まる。汲まれた水に司祭プダンダが呪文を吹き込むことで、神聖な水アムルタとなる。プダンダはこの水を神に捧げ、一人一人の頭上にしぶきを飛ばして儀礼に参加した人びとの邪気を払い、浄化する。なかにはその水を手のひらに受けて口に含んだりする人もいる。こうして儀礼は粛々と進められる。バリ・ヒンドゥーが水の宗教ともいわれるゆえんがこんなところにある。

バリ島の人びとによる湧水との接し方を見ていると、異界と生活世界とが混然としているように思われる。水源となる湧水地(池)に存在するはずの異界の出入り口で取水した水に聖性を蓄えたまま、自分たちの生活世界にもち帰り、異界のパワーを



湧水の取水場。バケツに水を受ける。インドネシアバリ島(1989年)



器に入った聖水「アムルタ」を指で弾いて神に捧げる。インドネシアバリ島(1989年)

よしだ ひろひこ  
吉田 裕彦  
天理大学附属天理参考館学芸員  
自称、展示サービス業。近年、文化人類学ネタをパツクに「火のめぐみ」、「モチコメの国ラオス」(天理参考館企画展)、「モン・ストーンアジアの竹文化」(天理ギャラリー展)などを共同企画、開催する。